

# 構成教育に関する一考察

## ～平面構成における「バランス」を事例に～

### A study about "composition" in design education

小川 直茂

OGAWA Naoshige

#### Abstract

As important points for planar artwork or design work, there are four types of "shape" "color" "texture" and "composition". Among them, "composition" is especially complex in content. I wanted to consider what kind of educational program should be provided so that students studying design can properly understand the composition. For this reason, I sorted out the basic information on composition in design education. In particular, I focused on "balance". I classified the balance expression into four categories and analyzed each of them. Finally, I thought about ways to increase the balance skill in composition.

Keywords: 造形教育、構成

#### 1. はじめに

絵画／イラストレーション／グラフィックデザインなどの平面作品制作に取り組む際、私たちは様々な画材や用具を駆使して、画面上の二次元空間に対して作品表現を展開する。その際に、作品表現の成否を大きく左右する複数の要素が存在し、制作者はそれらの要素に対して十分な検討を行った上で作品表現へと昇華させていくことが求められる（注 1）。著書『あたらしい基礎造形～造形要素の組み合わせによる造形メソッド』の中で、久保村は作品の印象を決定づける表現上の要素について「造形要素」という名称で紹介し、特に基本的で重要度の高い四大造形要素として「形」「色」「テクスチャ（質感）」「構成」の 4 つが存在すると述べている（注 2）。

筆者は同書の内容を基盤として、自身が所属する生活デザイン学科の専門教育科目「基礎造形」の授業を担当している。授業における一連の課題制作（表 1）を通じて、造形要素への理解を深め（注 3）、ファッション／建築・インテリア／ヴィジュアルの各専門分野で必要となる造形能力を養うプログラムを実施している。本授業での学生の課題制作への取り組みを見ている中で、構成能力の習得に重点を置いた課題において、作品完成度の個人差がやや大きいように感じられた。このことから、四大造形要素のうち特に「構成」に関して、他の造形要素と比べて学生の理解・習熟度合いの差が出やすい傾向があるのではないかと考えた。

表 1. 専門教育科目「基礎造形」の実施課題一覧

| No. | 課題内容                 |
|-----|----------------------|
| 1   | 点の疎密による立体感           |
| 2   | 平行線による構成～疎密と太さによる立体感 |
| 3   | 平行線による構成～色による透明視     |
| 4   | 自由直線による構成            |
| 5   | ネガティブな像による構成～断線・欠線   |
| 6   | 欠損した円によるネガティブな像の構成   |
| 7   | 円の漸進変化による構成          |
| 8   | 地と図のグラデーションによる構成     |
| 9   | 同形分割と等量分割            |
| 10  | ディストーション             |
| 11  | 同形ユニットによる平面充填        |
| 12  | 平面充填からのメタモルフォーシス     |
| 13  | 点による面の構成             |

四大造形要素の「形」は、作品をかたちづくる個々の造形素材について、その形象部分を抽出したものである。同様に「色」は個々の造形素材における配色部分を抽出したもので、これらはいずれも一つの作品の中に複数存在するのが一般的である。一方「構成」に関しては、作品内に配置された複数の造形素材を「一つの群」として取り扱うため、個々の造形素材を個別に認識する「形」「色」の造形要素よりも必然的に高い複雑性を備えているといえる。また、「色」の造形要素が「色相／明度／彩度」といった属

性を有し、これらの属性によって数値的な把握を可能としているのに対して、「構成」には絶対的な評価軸が明確に定められておらず、その認識において感覚的要素が多分に影響を及ぼす傾向が見られる。以上のような要因が、「構成」に対する理解・習熟度の差異拡大を招いているのではないだろうか。

本稿では、学生個々の知識や経験の差異によらず「構成」に関する理解・習熟度合いを等しく高めていくための構成教育のあり方について模索するべく、構成とその教育にまつわる現状分析と考察に取り組んでみたい。

## 2. 構成について

まず「造形行為としての構成」の概要について、既往研究にもとづいて基本的な情報の整理を行う。

作品制作における「構成」は、複数の造形素材を表現目的に沿って配置し、組み立てていく行為を指す。久保村は「構成」の造形要素に從属する性質として「数」「位置」の2つの属性を紹介しており(注4)、「どのような数の造形素材がどのような位置に配置されているか」というのが構成において主に考慮すべきポイントであるといえる。ただし、同じ数や同じ配置であっても、使用する造形素材の形や色が異なれば作品としてのイメージは大きく変化し、また目指すべき表現目的によっても施した構成の評価は異なってくる。こうした複雑さが招く作品制作時の混乱を軽減するため、構成教育においては使用する造形素材の形や色を限定した上で構成にのみ自由度を持たせて課題制作に取り組みさせるような手法が広く用いられている。筆者の実施する授業でも同様の手法を採用しており、課題「自由直線による構成」を例に取り上げると、太さと色を一種類に指定した直線を自由に配置して構成する、といった内容になっている(図1)。

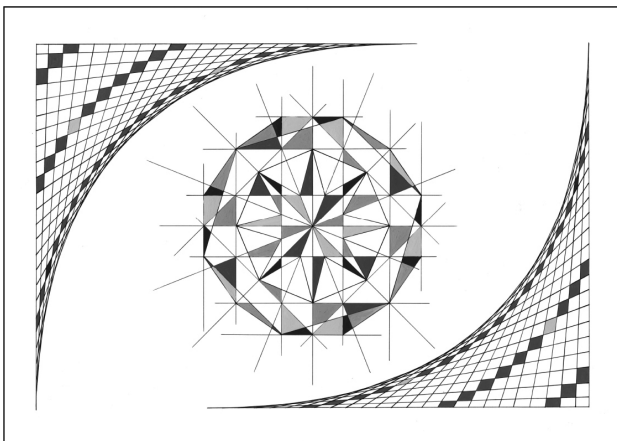


図1.自由直線による構成の作例

朝倉(注5)は、構成に関わる「配置」のバリエーションとして「重なる配置」「接する配置」「離れた配置」「集中する感じの配置」「拡散する感じの配置」「中庸の配置」「片寄った配置」の7項目を、「分割」のバリエーションとして「等形分割」「等量分割」「等分割に基づく自由な構成」「分割の方法と分割の種類の数」「タイル式分割」「漸変分割」「相似形分割」「自由分割」の8項目を取り上げている。これらの項目分類は、作品の表現目的との関連性を別に置いた上で、純粋に構成のパターンを理解するための情報として非常に有効であるといえる。

南雲(注6)は、造形素材の構成によってもたらされる心理効果に焦点を当て、「放射」「開放」「閉鎖」「図と地」「錯視」「推測」「虚像」の7項目の分類を紹介している。表現意図を概念として抽象化し、これら7項目から連想されるイメージと照らし合わせることによって、感覚的評価ではあるものの、表現意図に対する構成アプローチの効果について一定程度の検証ができると考えられる。

また南雲は、構成手法と題して「バランスと破調」「コントラスト」「強弱とメリハリ」「緊張感」「ムーブメント」「方向」「リズム」「シンメトリー」「グルーピング」「リピート(連続)」「遠近と透視図」「陰影と立体表現」「デフォルメ」「硬軟」「アクセント」の15項目を挙げている(注7)。これらは、前述した心理効果面からの分類7項目に対して、視覚効果の面から分類を施したものであるといえることができるだろう。

## 3. 平面構成におけるバランスについての分析

南雲が構成の視覚効果的分类として取り上げた項目の中で、筆者は特に「バランス」に注目した。バランスは作品の部分(ディティール)ではなく作品全体によって表現され、その表現のあり方は作品自体の総合的な印象に大きな影響を及ぼす(注8)。ゆえにバランスのコントロールは作品制作において非常に重要だが、コントロールのためには作品をかたちづくる全ての素材を一元的に取り扱う必要があるため、その方法が多様かつ複雑で、制作者個々の感覚に依拠する部分が非常に大きい。こうしたことから、学生の資質の差異によらず効果的な構成教育を検討していく上で、バランスに関する分析を行って理解を深めることが有意義であると考えに至った。

南雲はバランスに関する記述において「バランスが取れているか、破調しているか」の2分類で解説を行っているが、本稿ではこの部分についてさらに詳細に把握するべく、「静的安定」「動的安定」「反安定」「不安定」の4項目に分類して分析を行いたい。

### 3.1.静的安定 (図2)

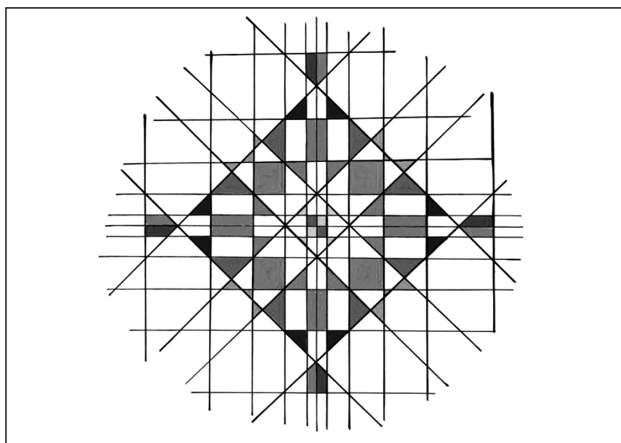


図2.静的安定の作例

平面上の造形素材について、シンメトリー（対称性）や均等なリズムなどに配慮した配置を行い、バランス感を表現したものを「静的安定」と呼ぶ。造形素材の配置だけでなく、造形素材の形や色についても規則性にもとづいた選択を行う点がポイントである。整然として落ち着きを感じさせ、安心感を与えるイメージとなることが多い。他方、秩序にもとづいた構成であるためにダイナミックな演出が得意ではなく、退屈な印象を与えるケースもある。

### 3.2.動的安定 (図3)

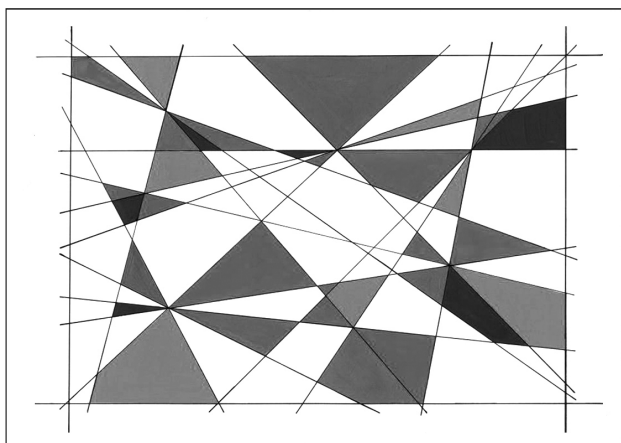


図3.動的安定の作例

造形素材の形や色について統一感を持たせず、異なる種類の造形素材を用いて配置の工夫によってバランス感を表現したものを「動的安定」と呼ぶ。静的安定の構成と比較して明確に秩序立った配置ルールがない場合が多く、塗りや面積の大小や、配置による粗と密の関係、色の違いによる重さの印象差などを元に画面全体の中で異なる造形素材同士の釣り合いをはかっていく必要がある。そのため、表現の難易度は静的安定と比べてやや高いといえ

るだろう。使用する造形素材の差異性が大きいほど躍動的で力強いイメージが強まる傾向にある。

### 3.3.反安定 (図4)

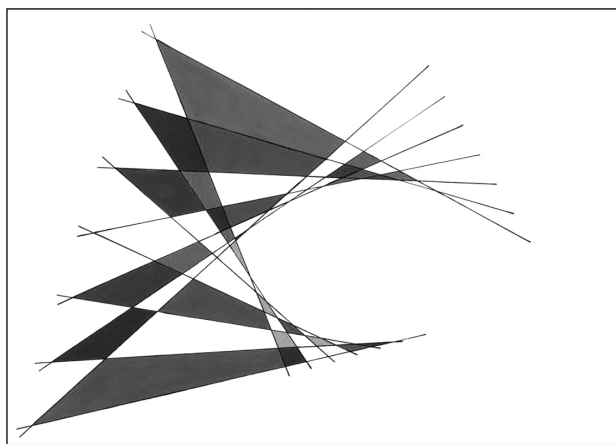


図4.反安定の作例

画面における安定感の創出を目的とした静的／動的安定とは異なり、「安定しない」表現を目標とし、その主旨を鑑賞者が明確に読み取ることができる構成を「反安定」と呼ぶ。安定感を欠いた構成から連想されるアンバランスが作品に感じられ、そこから転じて先鋭感や緊張感を演出することが可能である。また、バランスの崩れから生じる重心の偏りや流れの発生などを利用して、鑑賞者の視点や視線を特定の位置や方向に誘導することもできる。

### 3.4.不安定

静的安定／動的安定／反安定のいずれにも属しない構成を「不安定」と呼ぶ。安定感を欠いた構成となっている点では反安定と共通する部分があるともいえるが、反安定との最大の違いは、構成によって生み出されたバランスの崩れを作品の表現として活用できていない（あるいは制作者が作品表現として活用することを意図した場合でも鑑賞者が制作者の意図を読み取ることができない）点である。

不安定な構成の発生事例の一つとして「安定的構成からのわずかなずれ」などがある。ここでは制作者が安定的構成を追求しているのか反安定的構成を追求しているのかを読み取れない不明瞭な構成が不安定な印象を招く要因になっているといえる。

## 4.平面構成におけるバランス能力に関する考察

構成は、形／色／質感とともに作品表現の根幹をつかさどる要素であり、制作者は構成の検討にあたって表現としての意図を明確に設定し、その意図にもとづいた構成計画を立てることが求められる。つまり、制作者が構成にあたって、作品表現との関連性を考慮しなかったり制作者の意

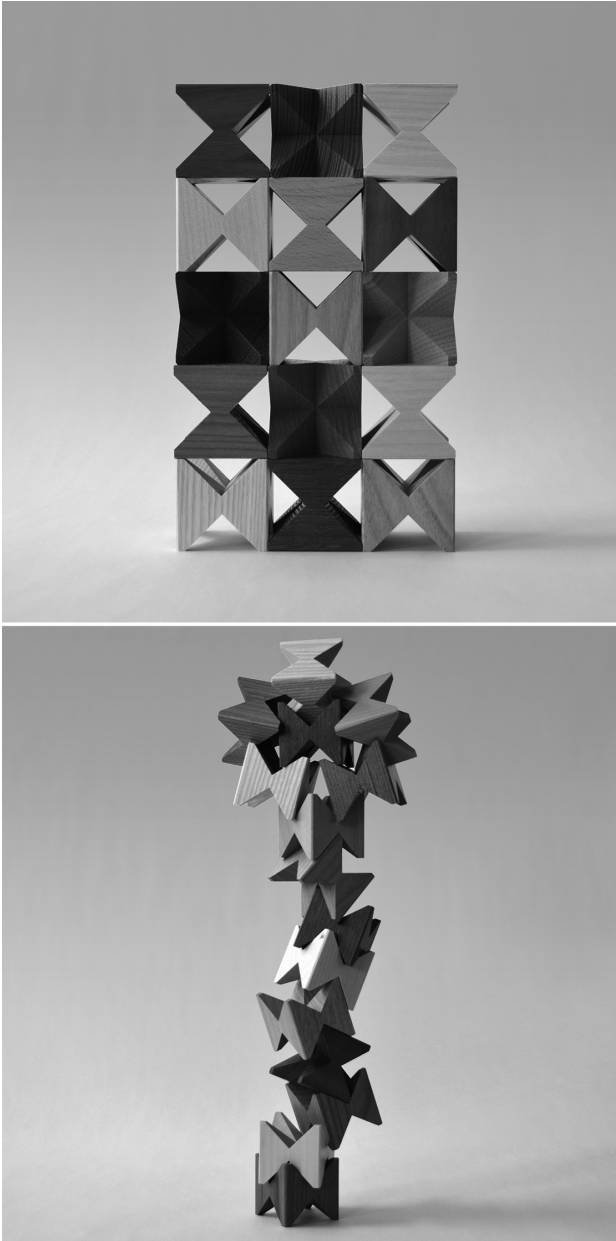


図 5.構成玩具による静的安定（上）動的安定（下）の構成

図が鑑賞者に正しく伝わらないことで生じる「不安定な構成」を避け、静的安定／動的安定／反安定のいずれかのバランス表現を確立させることが重要だといえるだろう。この指標が、目指すべき構成スタイルを吟味する上で有効に機能するのではないかとと思われる。

静的安定／動的安定／反安定のバランス表現能力を習得する上では、「どのような状態が安定なのか」についての感覚を養うことが効果的である（安定状態への理解が深まれば、安定状態をつくり出す構成をあえて行わないことで反安定的構成の表現に展開することも可能であるため）。

作品表現に対して鑑賞者が感じるバランス感は、現実空間における物理学的バランス感とおおむね同様であると

考えて差し支えない。このことから、様々な大きさや形の部材を使用して重力に対するバランスを取りながら構成する積木のような構成玩具（図 5）は、構成におけるバランス感覚を養うためのトレーニングツールとして、あるいは学生個々のバランス感覚を把握して具体的な構成教育指導の手がかりとする測定ツールとして有用ではないだろうか。構成玩具は幼児教育の分野で注目されるケースが多いが、美術・デザイン分野における教育支援ツールとしての役割も期待できるのではないかと考える。

### 5.おわりに

本稿を通じて、作品制作における構成の位置づけと性質について基本的な情報整理を行い、構成の中でも特に「バランス」に注目してその分析と考察を行った。今後は構成に関する他の項目についても知見を深めていくと同時に、本稿で展望として記した構成玩具の教育支援ツールとしての活用についても、実験調査を行ってその有効性や具体的な手法の検討を進めていきたい。

### 【注および参考文献】

1. 真鍋一男：造形の基本と実習，美術出版社，1982
2. 久保村里正（監修）：あたらしい基礎造形～造形要素の組み合わせによる造形メソッド，16-18，文教大学出版事業部，2014
3. 本授業は、ファッション／建築・インテリア／ヴィジュアルの3分野の学生を対象としているため、分野の違いによらず共通して取り組める課題として、画材をアクリルガッシュとケント紙に限定した平面作品制作課題のプログラムを実施している。そのため、四大造形要素のうち「テクスチャ（質感）」の学習については、本授業内では取り上げていない。
4. 久保村里正（監修），前掲書，19
5. 朝倉直巳：芸術・デザインの平面構成，81-137，六耀社，1984
6. 南雲治嘉：視覚表現，42-54，グラフィック社，1994
7. 南雲治嘉，同書，56-86
8. 朝倉は『芸術・デザインの平面構成』において、造形表現におけるバランスの重要性について「コンポジションの根底を支える基礎的にして基本的な力である」とし、自身が取り上げた「配置」「分割」の様々なパターン検討が最終的に作品上のバランスの問題に帰着する、と述べている。

（提出日 平成 30 年 1 月 9 日）